



TITLE:

河南省商城縣の紳士層の存在形態

AUTHOR(S):

山根, 幸夫

CITATION:

山根, 幸夫. 河南省商城縣の紳士層の存在形態. 東洋史研究 1981, 40(2): 277-302

ISSUE DATE:

1981-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153818>

RIGHT:

河南省商城縣の紳士層の存在形態

山 根 幸 夫

はじめに

本稿の基本資料として利用したのは、嘉慶八年（一八〇三）刊の『商城縣志』である。同書の卷末には、その刊行資金の寄附者名簿（助修姓氏）が附録されており、而も紳士については、各人の官職、あるいは進士・舉人・生員・監生などの學位も記入されている。商城縣の紳士は、恐らく全員が、この縣志刊刻のために寄附したであろうと考えられる。

卷頭に掲げられている、縣志編修に干與した紳士たちの、官職・學位・姓名などを示すと次の如くである。但し、商城縣人（邑人）のみに限定する。

参 閱

實錄館纂修翰林院編修

程國仁 傳臚⁽²⁾

翰林院編修

黃仁萬 進士⁽³⁾

刑部山西司員外郎

張國鶯 監生

刑部主事陝西司行走候選員外郎

周 鉞 進士

刑部主事廣東司行走

黃思宸 進士

內閣中書

何允徽 進士

分 修

候選訓導

周之驥 歲貢生

庠 生

周之驥

督 修

誥封奉直大夫

黃師萬 庠生

候選知縣

楊嗣沅 進士

貢生

吳錦含

候選州同

熊家社

參訂

庚申科舉人

楊心鎔

候選光祿寺典簿

周曦 貢生

廩貢生

王輔政

監生

楊文驃

監生

周之璠

校對

庠生

何毓琬

增生

洪履益

庠生

熊傳本

廩生

王道平

經理

署山東汶上縣縣丞試用縣丞

周衡 貢生

州同

周文述

貢生

楚維光

繪圖

山人

裴應麒

東路探訪⁽⁴⁾

揀選知縣

王世瑚 舉人

貢生

吳錦含

廩生

楊維清

南路探訪

候選知縣

楊嗣沅 進士

庠生

熊傳本

監生

周之璠

廩生

黃榮

西路採訪

庚申科舉人

楊心鎔

增生

洪履益

北路採訪

誥封奉直大夫

黃師萬

廩生

楊嗣寶

貢生

楚維光

右の他に、辦事書吏として、吏房江可純、戶房王有年、禮房管滋任、兵房傅士全、刑房丁耀先、禮房吳鳳來、倉房熊甘溥、禮房程安仁、倉房許朝陽、工房沈禹暉、以上十二名の書吏の姓名も掲げられている。

この様な名簿を見ると、當然のことながら、地方志の編修に當っては、在地の紳士たちが動員され、それに干與していた事實を確認することができる。但し、進士合格者である、いわば上層紳士は、「参関」という名目的な関わり方にすぎず、實際に編修に従事した者の大部分は下層紳士であった。楊嗣沅だけは、進士出身であるに拘わらず、實務に參與したようである。

さて、筆者は本稿で清代中期における、河南省商城縣の紳士層の存在形態を考察しようと試みるものである。これら紳士の大多數は封建地主であったことは、想像に難くないが、彼らの資格がどのようなものであり、どのような政治機能を持っていたか、また、江南について言われるように、城居紳士が多く、在郷紳士が少いという現象を、一九世紀初頭の河南省でも見出せるかどうか、これらの點について、少しでも具體的に検証してみたいと考える。

一

嘉慶商城縣志の卷末に附録された「助修姓氏」の中から、一般庶民を除き、紳士と認められる肩書のある者を抽出し

て、次に列挙する。便宜上、頭に通し番號を附けることにしたい。

一 增貢生⁽⁶⁾
誥封奉直大夫

黃澤萬

二 翰林

程國仁

三 舉人

王世瑚

四 州同

周文述

五 布經

高其睿

六 縣丞

高楨

七 府經

沈鳳翔

八 主簿

桂一枝

九 監生

桂宮枝

〇 貢生

高其驥

二 貢生

楊心悅

三 廩生

熊傳綮

三 文生

雷炳堂

四 武生

彭茂林

五 監生

彭友林

(以上東門保)

楊文職

六 進士

楊嗣沅

七 州同

熊家祉

六 訓導

黃試萬

九 貢生

楊文職

〇 貢生

李炳

三 縣丞

黃樸

三 從九

黃椿

三 文生

楊嗣澧

四 拔貢

楊嗣曾

五 文生

高其度

六 文生

孫家瑞

七 武生

盧保清

六 監生

楊文鴻

元 職員

王國棟

〇 從九

呂德福

三 生員

熊家鵬

三 縣丞

熊方寶

(以上南門保)

王世瑜

三 誥封奉直大夫

黃師萬

四 翰林

黃仁萬

五 舉人

王世琬

六 增生

王世瑜

七 文生

王世琰

八 文生

楊其馨

元 增生

洪履益

四 文生

何毓珖

四 文生

熊家灝

四 文生

熊方煊

四 武生

楊文新

四 文生

楊文徵

四 武生

任殿元

四 武生

楚安居

四 武生

李思忠

四 武生

熊安駁

四 武生

黃登五

五 武生

張元昌

五 從九

程步洲

五 武生

管太平

五 監生

雷屏翰

五 監生

王輔治

五 職員

羅景宸

五 職員

周錦商

五 職員

丁冠英

五 職員

黃思諤

五 職員

黃思謐

五 職員

沈輅南

五 吏目

黃思箴

五 從九

黃良弼

(以上西門保)

楚維光

五 廩生

熊家祐

五 貢生

吳錦含

五 貢生

王恩滯

五 貢生

熊傳本

五 監生

楊文驤

五 監生

楊鯁

五 監生

熊方毅

齒監生	張金鐸	壹縣丞	程文忻	貳從九	程文愷	貳醫官	李正春
貳生員	周作銘	貳監生	周廷湊	叁監生	周作孚	叁監生	周之齡
叁監生	周廷塔	叁生員	周廷珍	叁監生	周之泌	叁生員	周璞
叁典簿	周曦	叁縣丞	周衡	叁監生	周之璫	(以上北門保)	
允監生	梅光前	叁武生	梅映堂	叁武生	梅映榮	叁文生	梅映峯
叁監生	梅映華	(以上東關保)		叁從九	張蘭	叁監生	岳峯清
叁監生	陳炳勳	叁監生	蔣德清	叁從九	陶登魁	叁武生	陶登甲
貳吏目	黃銳	貳職員	喬以奎	貳吏員	袁昌齡	(以上南關保)	
貳武生	黃元勳	貳監生	劉鳳鳴	貳武生	陳元愷	貳武生	熊發璋
貳職員	葉華章	貳武生	陳應元	貳職員	熊發瑞	貳監生	李中清
貳武生	賈登雲	(以上西關保)		貳文生	熊居廣	貳生員	熊德覃
貳職員	馮潮洪	(以上北關保)		貳生員	王炳	貳生員	李恪
貳武生	阮良仟	貳監生	梁文輝	貳監生	王煊	貳監生	徐慎德
叁監生	劉恭	叁監生	徐毅德	叁監生	卜金川	叁監生	徐光潔
叁監生	陳志宏	叁監生	王燦	叁職員	楊蔭庭	叁職員	彭蘭亭
叁職員	蕭鳳鳴	叁職員	謝月昆	叁文生	李盛勳	(以上胡太寺保)	
叁貢生	王文明	叁文生	王開運	叁文生	張夢元	叁監生	張雲路
叁監生	夏宗衡	叁監生	蔣發魁	叁監生	薛登五	叁監生	鄭發瑞
貳監生	管登雲	貳監生	楊雲昌	貳監生	高瑛	貳監生	余文耀
貳監生	余文達	貳監生	樊正時	貳監生	葛祥蘊	(以上三山口保)	

一四 監生

吳建中

一四 職員

吳時中

一四 監生

吳善述

一四 監生

李國鵬

(以上袁武集上保)

一五 州同

何元祥

一五 文生

錢人鳳

一五 監生

楊御珍

一五 監生

汪貽務

一五 職員

陳日新 (以上袁武集下保)

錢人鳳

一五 文生

沈紹梁

一五 監生

方永馨

一五 監生

雷滿堂

一五 監生

馬謙

一五 監生

湯冠宇

一六 監生

葉逢春

一六 監生

夏恒清

一六 職員

楊光輝

一六 吏目

汪訓

(以上華岩寺上保)

一六 生員

趙殿鏞

一六 生員

邵大賓

一六 生員

劉廷元

一六 生員

周瑚

一六 生員

張作楷

一六 生員

周瑛

一六 生員

周珠

一七 生員

高子顏

一七 生員

劉升瀛

一七 生員

周建功

一七 生員

葛廷棟

一七 武生

董玉洋

一七 武生

董玉堂

一七 武生

秦登元

一七 武生

秦登奎

一八 武生

周臺

一八 監生

金廷元

一八 監生

黃凌雲

一八 監生

黃登雲

一八 監生

黃榮先

一八 監生

張作東

一八 監生

劉炳南

一八 監生

李復初

一八 職員

譚魯儒

(以上華岩寺下保)

張作東

一八 布經

敖振邦

一八 布經

敖振甲

一九 生員

劉維垣

一九 生員

李懷清

一九 監生

葉高見

一九 監生

敖和珍

一八 監生

敖席珍

一九 監生

張席儒

一九 監生

鄧三思

一九 職員

汪長久

(以上蘇仙河上保)

一九 廩生

吳書帛

二〇 文生

吳夢桃

二〇 監生

吳向日

(以上蘇仙河下保)

二〇 生員

張士賢

二〇 監生

張文睿

二〇 監生

馮鵬萬

(以上雙河保)

二〇 舉人

吳啓基

二〇 廩貢

吳鼎勳

二〇 從九

吳啓站

(以上雙河保)

二〇 從九

吳廷煥

二〇 監生

吳啓坡

二〇 監生

吳屏翰

二〇 生員

吳文蔚

二〇 從九

吳啓城

二〇 監生

吳世熙

二〇 監生

吳啓堵

二〇 監生

吳瑞庭

二〇 監生

漆嘉會

二〇 文生

羅秩

二〇 增貢生

羅月謙

(以上土鎮寨保)

二〇 監生

漆嘉會

二〇 文生

羅秩

二〇 增貢生

羅月謙

二九 豐順司巡檢	羅定紱	三〇 增廣生	羅定綬	三一 候選未入	羅定綬	三三 廩膳生	羅德寧
三三 廩膳生	羅月三	三四 監生	羅謙六	三五 文生	羅拱宸	三六 從九品	羅應宿
三七 監生	羅映婁	三八 監生	羅瑩	三九 州同	羅稠	三〇 貢生	羅保翰
三三 監生	羅捷三	三三 監生	羅耀南	三三 從九	羅象南	三四 監生	王希仁
三三 監生	王格	三三 文生	王作屏	三三 文生	吳文泰	三六 文生	吳文達
三三 監生	吳文思	三四 文生	吳行仁	三四 文生	吳行禮	三四 文生	吳行敬
三四 監生	吳行謙	三四 監生	吳忠佐	三四 庠生	吳國麒	三四 庠生	吳國植
三四 庠生	吳之驊	三四 從九	吳之學	三四 庠生	吳映祖	三四 羅邑監生	方光裕
三四 監生	周錦蘭	三四 監生	汪秀峯	三四 監生	吳宗魯	三四 監生	吳芳
三四 監生	吳庭瑞 (以上佛南河上保)	三四 文生	楊樸	三四 貢生	蕭城萬	三四 監生	蔣鑑
(以上太蘇河上保)		三四 文生	呂洪遠	三四 文生	王輔政	三四 文生	黃元吉
三四 文生	鄭文宗	三四 文生	何夢麟	三四 職員	何鳳麟	三四 職員	黃文英
三四 職員	王永鎮	三四 職員	楊嗣瀛	三四 監生	楊嗣沅	三四 監生	沈見龍
三四 監生	程大鵬	三四 監生	何紹麟	三四 監生	張河	三四 吏員	曹啓源
三四 監生	鄭文舒	三四 監生	朱玉珩	三四 監生	朱玉珊	三四 生員	朱衣
(以上太蘇河下保)							
二〇 生員	汪承儒 (以上青白河上保)	二一 監生	漆朝聘	二二 監生	漆宏三	二二 監生	漆宏三
二二 監生	吳貽瑞	二二 監生	吳拾亭	二二 監生	鄭廷藻	二二 監生	楊文藻
二二 監生	蕭中冕	二二 歲貢	葛葵	二二 從九	葛聯陞	二二 監生	葛聯芳
二二 監生	程維相 (以上青白河下保)	二二 試用訓導	羅摺	二二 生員	羅定滋		

二四 監 生 羅應門

(以上竹根河上保)

二五 監 生

黃 吉 二六 從 九

黃 杰 二七 監 生

三〇 監 生 易中華

三一 從 九

易世璠 三三 監 生

易世璠 三三 生 員

(以上梅溪塘上保)

三四 候選縣丞

張聯芳 三五 監 生

張聯輝 三六 從 九

三七 從 九 張聯第

三八 文 生

張啓棠 三九 從 九

張大存 三〇 監 生

三一 從 九 汪東杞

三三 監 生

廖萬青 (以上梅溪塘下保)

劉青照 三七 生 員

三四 監 生 賈維新

三五 生 員

邱正時 三六 生 員

陶秉烈 三三 監 生

三八 監 生 雷逢春

三九 監 生

李連發 (以上香官畝上保)

鄒應輝 三〇 監 生

三三 職 員 鄒承烈

三三 職 員

朱育萬 三三 職 員

張來賓 三四 監 生

(以上香官畝下保)

三五 知 縣

張振翔 三六 吏 目

張振吉 三七 布 經

監生(8)

三元 員外郎

張國鷺 三〇 縣 丞

張承紳 三三 監 生

三八 諸封奉直大夫 張振升

三元 員外郎

汪步雲 三四 監 生

余殿元 三五 監 生

三三 監 生 汪凌雲

三三 監 生

丁人傑 三六 監 生

丁人朋 三九 職 員

三六 監 生 魯作玉

三三 武 生

吳德鏞 三六 廩 生

吳德欽 三六 監 生

(以上枚武岩上保)

三四 生 員

吳秉哲 三六 生 員

洪 鎬 三六 生 員

三四 生 員 吳元藻

三四 從 九

黃家駒 三九 監 生

黃家學 三六 武 生

四七 候補訓導 洪啓堂

四八 監 生

周利行 三三 監 生

曹雲從 三四 武 生

三三 監 生 周志藝

三三 監 生

曹占林 三七 生 員

胡常清 三六 生 員

三六 武 生 曹占榜

三六 武 生

韓有澈

韓鳳文 (以上枚武岩下保)

三九 監 生 李步雲

三六 監 生

岳敦元

劉 坦 三五 監 生

三三 監 生 岳環東

三三 文 生

岳敦元

劉 坦 三五 監 生

沈鵬程

姚鵬九

黃色正

張聯甲

吳之珊

梅孔厚

陶秉烈

鄒應輝

李文昭

張振需

張承綬

陳毓岱

丁人寧

吳德錫

洪 錄

黃 楷

曹占魁

林必魁

黃輝映

三六監生	韋玉清	三六監生	韋長清	三六監生	呂思恭	三六監生	徐怡
三〇職員	張金	三〇職員	韋輔清	三〇職員	劉覺斯	三〇職員	許元長
三〇監生	吳廷瓚	三〇職員	吳錫齡	三〇武生	徐堂	三〇武生	陳士忠
三六職員	呂思明	三六職員	許登朝	三〇職員	胡志和	三〇監生	陳如福
三三職員	陳如悅	三三文生	吳家驥 (以上鄒家鋪上保)			三六武生	楊如翹
三五職員	楊立品	三六監生	梅秉鑑	三六監生	陳致中	三六武生	梅常清
三九職員	陳家泰	三九職員	呂洪九	三九職員	孔昭佑	三九監生	陳四箴
三三監生	梅盛齡	三九監生	梅向榮	三三監生	陳宗器	三六監生	劉有涵
三〇監生	楊心恆	三九文生	楊德顯	三九監生	楊詡	三〇監生	劉曙
三〇武生	劉永江	三〇武生	蕭定武	三〇監生	蕭勳 (以上鄒家鋪下保)		
四四監生	李啓祿	四四府經	李思本	四六未入	李思健	四七吏目	李彪
四八監生	沈作鑾	四九文生	胡格品	四〇文生	楊清魁	四二文生	湯聘三
四三從九	楊如鞏	四三監生	林士能 (以上觀廟鋪上保)			四四武生	趙士智
四五布經	趙振祖	四六從九	趙繩祖	四七監生	胡德明	四六監生	耿存性
四九監生	聞在朝	四〇文生	洪育萬	四三監生	董顯廷	四三監生	張合成
四三監生	張建功	四四監生	彭振祖 (以上觀廟鋪下保)			四四貢生	張伯珠
四六正九	朱可法	四七文生	朱紱	四六職員	朱綬	四九職員	朱純輝
四〇文生	袁時麟	四三文生	孫世麟	四三文生	孫紹箕 (以上銅井畝保)		
四三監生	余正璧	四四監生	余正榮	四四監生	史可遠	四六監生	史維邦
四七監生	張維駱	四八文生	許克英	四九監生	余鈞	四〇監生	余啓賜

監生	蕭子飛	監生	余耀坤	監生	余家法 (以上龍門河上保)	郭敏皇
監生	李致和	監生	吳光斗	監生	雷成文	余從德
文生	郭炳烈	文生	郭汲	監生	彭輔清	楊其魁
監生	余崑山	監生	甘定華	監生	吳家麟	湯汲三
武生	楊其清 (以上龍門河下保)	武生		監生	湯士朝	鄧宏道
監生	周毓秀	職員	葉長青	文生	鄧學濂	鄧橋
職員	鄧元	監生	鄧舉	監生	鄧亮	盛士瑚
(以上通泉畝上保)		監生	盛克家	監生	盛忭	李蘭臺
監生	楊以仁	文生	李倬	武生	李青雲	李文鵬
監生	李擢秀	監生	李宇棠	武生	李大鵬	馮若愚
(以上通泉畝下保)		文生	馮愷	從九	馮兆典	馮應綬
從九	馮玉山	武生	馮扶青	文生	馮應綿	陶應奎
從九	馮炳光	監生	馮朝綱	舉人	余中甲	余英華
訓導	周文英	文生	周華南	職員	周希中	田功烈
(以上考隆河上保)		監生	李殿勳	監生	余尊德	羅定棠
監生	余中恂	職員	余耿光 (以上考隆河下保)	生	徐忻	謝暉
生員	岳湘	職員	岳遇清	生員	田紹武	滕建鐸
(以上梅河橋上保)		監生	范啓榮	從九	戴炳焜 (以上梅河橋下保)	袁發魁
生員	洪涑	生員	李玉珍	生員	袁登魁	
生員	楊居智	生員	楊來章	生員		

五三 生員	泰鳳鳴	五四 監生	丁連清（以上南司集保）	五五 監生	楊玉亭
五六 監生	高聘三	五七 監生	熊其楠	五八 監生	張德厚
五〇 監生	陳綵章	五二 監生	張履仁	五三 生員	陳斐文
五四 生員	胡瑞輯	五五 生員	胡協占	五六 監生	熊适（以上雙椿鋪保）
五七 監生	陳天貴	五八 監生	歐秀先	五九 監生	梅之學
五三 監生	梅曉東（以上三里坪保）	五三 監生		五三 監生	柏珍
五四 縣丞	洪福（以上上石橋保）	五三 監生		五三 監生	劉獻桂
		五三 監生		五三 監生	王士元

（以上陳家集保）

二

右に引用した「助修姓氏」によって明らかのように、嘉慶八年當時の商城縣の紳士總數は五三六名であるが、この中には武生四二名が含まれているので、これを除くと純粹な紳士は四九四名になる。以下、これら四九四名の紳士の階層を分類してみた。

紳士とは「科舉制と學校制、そして捐納制を媒介として國家權力からある資格を得て、官位と直接・間接に結びついてゐる層を指す。具體的に言えば、現任官・退任官・免官者など官位と直接に關係ある層と、舉人・貢生・監生・生員など官位に近接していない官位志望層をいう」⁽⁹⁾。それ故、一言に紳士といっても、紳士の範疇に含まれる諸階層を總稱したもので、これを一括して論ずることは、不適當な場合も出てくる。

紳士の中で、現任官・退任官などと、進士⁽¹⁰⁾の資格保持者は上層紳士といふべきで、一般的に「縉紳」「鄉宦」あるいは「鄉紳」などと稱せられるものである。これに對して、舉人・貢生・生員・監生などは、官位とは直結しておらず、その

資格のままでは官位に就き得る可能性は殆んどなく、前者に對して、いわば下層紳士というべき者であつた。これらの中で、數量的に壓倒的多數を占め、その社會的機能の面でも大きな影響力を有していたのが、生員・監生であつた。生員・監生が、紳士の中で特別大きな比重を占めていたことは、以下の考察でも明らかになるであらう。

なお、戦後わが國の中國史研究者の間では、餘りにも安易に「郷紳」という語を使用しすぎる嫌がある。まだ、共通の「郷紳」に關する定義は確立していないにも拘わらず、「郷紳的支配」「郷紳的土地所有」といった概念が、あたかも定説であるかの如く使用されている。私は「郷紳」という語に對して、明確な定義を設定する必要性を痛感している。而して上層紳士・下層紳士を併せた紳士層を考えるとすれば、やはり「紳士」という用語を用いるのが、最も適切ではないかと考える。

次に、武生を除く、商城縣の紳士を階層別に分類してみたい。まず、上層紳士に屬する者から擧げていきたい。高官保持者としては、第一に張國鸞(三二)を擧げねばならぬ。彼は監生出身にすぎぬが、刑部山西司員外郎(從五品)に陞つてゐる。商城縣居住の紳士の中では彼が最高位である。次に、布政司經歷(從六品)には高其睿(五)、熊家祐(六)、敖振邦(二六)、敖振甲(二六)、張振需(三三)、趙振祖(四二)、梅旭東(五三)の七名がいる。また、州同(從六)には周文述(四)、熊家社(一七)、何元祥(二五)、羅稠(三九)、姚鵬九(二六)、李蘭臺(四三)の六名がいる。次に翰林院編修(正七)の程國仁(三)、黃仁萬(四)と、知縣(正七)の楊嗣沅(二)、候補知縣(正七)の張振翔(三五)は、いずれも進士出身であつた。光祿寺額外典簿(從七)の周曦(八)も此處に加えるべきであらう。

右に擧げた七品以上の退任官、あるいは候選官は、上層紳士というべきもので、いわゆる「郷紳」に該當する。但し商城縣の四九四名の紳士中、上層紳士に郷紳に屬する者は、僅か一九名にすぎないという事實を注目すべきである。

右の他に「職員」と呼ばれる者がいる。商城縣志卷八、貢舉志、職員の條には、

黃綱瑞之孫 張振需(三七) 梅旭東(五三) 趙振祖(四二) 敖振甲(二六) 敖振邦(二八) 以上捐布經職

熊家祈 熊家標 熊家社(七) 周文述(四) 李獻欽 何元祥(五) 敖可珍 李蘭臺(四三) 以上捐州同職

とある。右によれば、職員とは布經(從六)および州同(從六)の職を捐納によって入手した者を指すようである。但し、「助修姓氏」に職員と記入されている者と、右の貢舉志に挙げられている職員とは一致しない。即ち、「助修姓氏」に職員と記されているのは、王國棟(三六)、周錦商、丁冠英、黃思諱、黃思謐、沈輅南(五十六)、喬以奎(二二)、熊發瑞(二〇五)、葉華章(二〇七)、馮潮洪(二四)、彭蘭亭、蕭鳳鳴、謝月昆、李盛勳(三六三)、吳時中(二四)、陳日新(二五)、楊光輝(二六)、譚魯儒(二八)、汪長久(一九)、黃文英、王永鎮、何夢麟、何鳳麟、沈見龍(二四六)、鄒承烈、朱育萬、張來賓(三一三)、丁人寧(三六)、張金、韋輔政、劉覺斯、許元長(三〇七)、吳錫齡(三七)、呂思明、許登朝、胡思和(三七八)、陳如悅(三八)、楊立品(三八)、陳家泰、呂洪九、孔昭佑(三九九)、朱綬、朱純輝(四三、四四)、楊其魁(四五)、葉長青(四〇)、鄧元(四三)、周希中(四九)、余耿光(四七)、岳遇清(五〇)の四九名であるが、彼らの姓名は貢舉志の職員の中には全く見當らない。これはどういう理由であらうか。

なお、貢舉志、職員の條に「布經の職を捐納」した者と記されている敖振邦、敖振甲、張振需、趙振祖、梅旭東らは、「助修姓氏」にはただ布經と記されており、周文述、熊家社、何元祥、李蘭臺はただ州同と記入されている。私はさきに彼らを退任官に数えたが、實は彼らも實官ではなく、捐納官にすぎなかったのである。この様に見ると、商城縣における、七品以上の退任官は、非常に少數にすぎず、實際には進士合格者以外で、七品以上の實官に就いた者は殆んどいなかったのではないかとさえ推測される。但し、捐納官でもそれに附随した特典は賦與されたわけである。

次に、八品官の經驗者を擧げてみよう。府經歷(正八)に沈鳳翔(七)、李思本(四五)、陶應奎(四八)の三名がいる。また、縣丞(正八)には高楨(六)、黃樸(三二)、熊方寶(三三)、程文忻(七五)、周衡(八七)、張聯芳(三四)、張承紳(三〇)、洪福(五四)の八名がいる。訓導(從八)には、黃試萬(二八)、羅摺(三九)、洪啓堂(四七)、周文英(四九)の四名がいる。最後に任官していない舉人として、王世瑚(三)、王世珖(五)、吳啓基(二五)、余中甲(四七)の四名がいる。舉人は任官し

なくとも、八品官待遇を受けたので、此處に分類した。なお、右に擧げた府經・縣丞・訓導の中にも、かなり捐納官がいたのでないかと考えられる。因みに張聯芳は候補縣丞、羅摺は試用訓導、洪啓堂は候補訓導であつた。これらの八品官、または八品官待遇者を合計すると一九名になる。

九品官としては、主簿(正九)、吏目(從九)、巡檢(從九)などがある。まず、主簿は桂一枝(八)の一名のみで、吏目には黃思箴(六)、黃錕(一〇〇)、汪訓(一四)、張振吉(三六)、李彪(四七)の五名がある。巡檢は羅定紱の一名のみである。勿論、彼らの中にも捐納官がいたかも知れない。この他は、袁昌齡(一〇二)、曹啓源(三七)の如く「吏員」と稱する者がいる。吏員については、縣志卷八、貢舉志、吏員の條に、

陶 愷候選從九品 張鳳現候選經歷 呂德福考職未入流 符其英考職從九品 楊禹輝考職從九品 朱可法……(略)……以
上捐從九職。

とあるから、吏員は從九品の官を捐納した者の如くである。以上で、九品官および九品官待遇者は九名になる。

これらの他に、正、從九品の位階を有している者がある。即ち、正九品の朱可法(四六)、從九品の黃椿(三三)、呂德福(三〇)、羅景宸(五)、黃良弼(六)、程文愷(七)、張蘭(九)、陶登魁(九)、吳啓站(一〇七)、吳廷煥(三九)、吳啓城(二三)、羅應宿(三六)、羅象南(三三)、吳之學(四八)、葛聯陞(三九)、黃杰(二九)、易世瑚(三〇)、張聯甲、張聯第(三〇六、三七)、張大存(三九)、汪東杞(三二)、吳秉哲(三四)、楊如鵬(四三)、趙繩祖(四六)、馮兆典、馮若愚、馮玉山(四九一八)、馮炳光(四五)、田紹武(五四)の二九名である。その他、未入の李思健(四六)、候選未入の羅定紱(三三)、もいる。醫官李正春(七)も、ここに加えておきたい。以上で九品官に準ずる者は、三二名となる。

次に、八品・九品に準ずる者として、貢生・生員・監生など、所謂「生監層」があり、紳士層の壓倒的多數を占めている。これらの中で最も地位が高かつたのは「拔貢生」である。拔貢生とは「每十二年國子監ヨリ上奏シ、裁可ヲ經テ各省學政使ニ旨ヲ下シ、科考ノ後ニ於テ、歲考・科考ノ優等生員ノミヲ集メテ更ニ選拔試験ヲ行ヒ、文章・品行共ニ優レタル

右の如く文生は五三名となる。更に庠生は黃師萬（三三）、吳國麒、吳國植、吳之驊（三三—四四）、吳映祖（四四）の五名である。以上で、生員・文生・庠生を合計すると一二〇名になる。監生の二三〇名に比べると半数にすぎない。清代の鄉村社會では、生員よりもむしろ監生の方が問題になった背景もわかるであろう。

次に、商城縣の紳士を階層別に表示すると左の如くなる。

表 1

	人 數	階 層
上層紳士	19名 49名	7品官以上 職 員
下層紳士	15名 4名 9名 32名	8品官 舉 人 9品官 正從9品 (含未入)
學 生	16名 230名 120名 42名	貢 生 監 生 生 員 武 生
	536名	計

「郷紳」とよばれる者は極めて少數にすぎなかった。但し、かかる現象は必ずしも商城縣のみに限ったものではなく、全國各州縣に共通した現象であったと言えよう。

三

商城縣の紳士たちは、縣内のどの地域に居住していたのであろうか。江南では、明末清初になって城居地主の激増した事實が屢々強調されているが、果して商城縣でもその様な現象が見られるのであろうか。それを検証する爲に、各保別・階層別の紳士分布表を作成してみた（表2）。以下、この表を手掛りにして、商城縣の紳士分布状態を考察してみることにした。

上のような構成になるので、商城縣の紳士の中で、七品以上の官僚は僅かに紳士全體の三・八%にすぎず（但し、武生を除いて計算）、七品以上の待遇を受けた職員を含めても、一三%餘りにすぎない。これに對して、學生をも含めた下層紳士は、全體の八六%近くを占めている。換言すれば、商城縣の紳士層の壓倒的多數は生監層であり、いわゆる「郷宦」

保		7品官 以上	職員	8品官 署人	9品官	正從9 品末入	貢生	監生	生員	武生	計
路	梅溪塘上保	1				1		2	1		5
	下保			1		4		3	1		9
	香官坂上保							4	3		7
	下保		3					2			5
	枚武岩上保	3	1	1	1			8		1	15
	下保			1		1		9	7	4	22
西 路	鄒家鋪上保		9					9	2	2	22
	下保		4					11	1	4	20
	觀廟鋪上保			1	1	2		3	3		10
	下保	1				1		7	1	1	11
	銅井坂保		2			1	1		4		8
	龍門河上保							10	1		11
	下保		1					9	2	1	13
	通泉坂上保		2					6	2		10
	下保	1						6	1	3	11
	考隆河上保		1	3		4		2	4	1	15
北 路	下保		1					4			5
	梅河橋上保		1					1	3		5
	下保					1		2	3		6
	南司集保							1	5		6
	雙椿鋪保							8	4		12
	三里坪保	1						4			5
	上石橋保			1				2			3
路	陳家集保							1	1		2
合 計		19	49	19	9	32	16	230	120	42	536

表 2 階層別・保別紳士分布表

保		7品官 以上	職員	8品官 擧人	9品官	正從9 品未入	貢生	監生	生員	武生	計
城	東門保	3		3	1		3	2	2	1	15
	南門保	2	1	3	1	2	3	1	4	1	17
	西門保	1	5	1	1	2		2	9	9	30
	北門保	2		2		2	3	10	7		26
	東關保							2	1	2	5
	南關保		1		2	2		3		1	9
	西關保		2					2		5	9
	北關保		1						2		3
東 路	胡太寺保		4					10	2	1	17
	三山口保						1	12	2		15
	袁武集上保		1					3			4
	下保	1	1					2	1		5
	華岩寺上保		1		1			6	1		9
	下保		1					7	11	5	24
	蘇仙河上保	2	1					5	2		10
	下保							1	2		3
	雙河保							2	1		3
	土鎮塞保			1		3	1	5	1		11
南	佛南河上保	1			1	4	2	17	15		40
	太蘇河上保							2			2
	下保		5		1		1	7	5		19
	青白河上保							2	2		4
	下保						1	1	9		11
	竹根河上保				1	1		3	1		6
	下保							1			1

因みに、商城縣の戸數は、嘉慶七年現在、三九、二六七戸、人口は一五一、五五九人であつた。⁽²⁵⁾縣内には合計五四保があるから、一保の平均戸數は七〇〇餘戸となり、平均口數は二、八〇〇人程度になる。この様に戸數、人口比から見ても、縣内の紳士は極めて少數であつたからこそ、下層紳士といえども、社會的にすこぶる大きな影響力を行使し得たわけである。

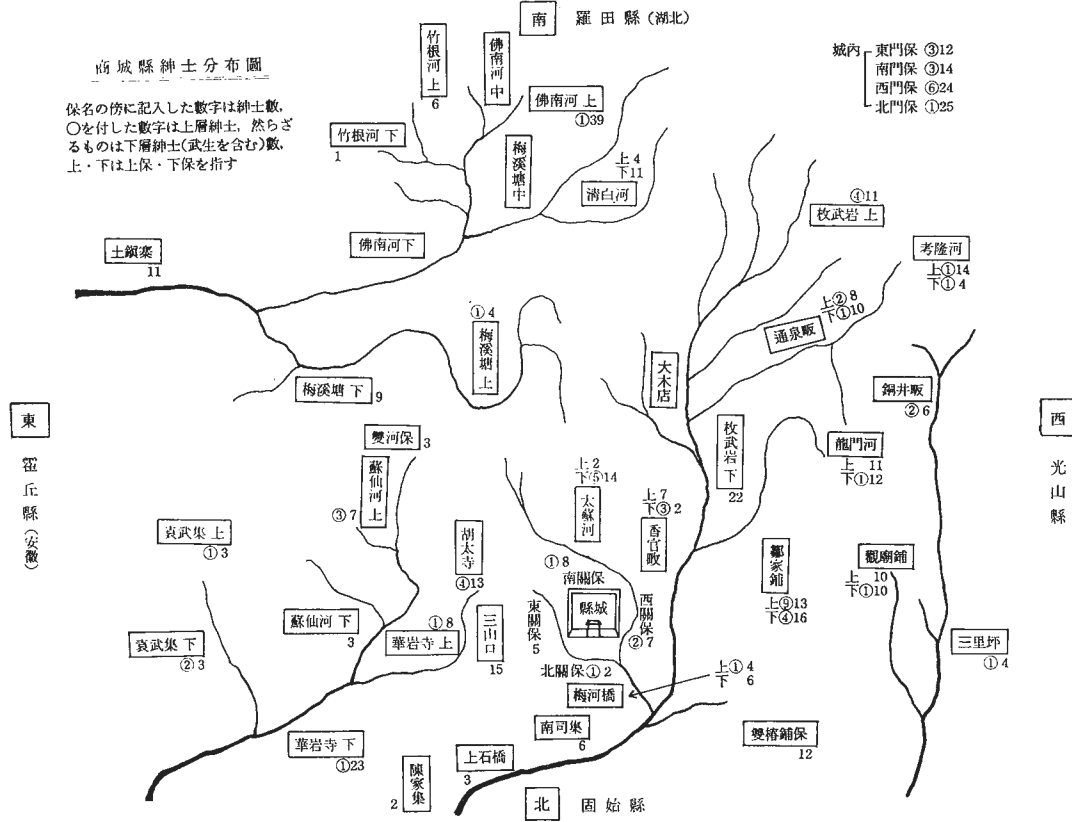
さて、商城縣は城内が四保、四關も四保に分れていた。この城關地區が、いわば商城縣の中心地區であつた。この八保内に居住する紳士は、七品官以上七名、職員一〇名、八品官（舉人を含む）九名、九品官六名、正從九品（未入を含む）八名、貢生九名、監生二名、生貢二五名、武生一九名になる。比較的狭い區域に紳士がこれだけ集中していることは、やはり紳士の城居化の傾向を示すものかも知れない。但し、七品官以上でも、他の一一名、職員では三九名、八品官でも一〇名が鄉村に居住している事實を無視できない。

殊に、監生に至つては、全體の一割しか城關に居住しておらず、生員でも僅かに二割が城關區域に住んでいるにすぎない。つまり、上層紳士よりも下層紳士の方が鄉村内に多く住みついており、それだけ一般民衆との接觸も多く、社會的により大きな影響を與えたのではないかと考えられる。

なお、鄉村の各保の中には、紳士が一人も居住していない地域もあつた。例えば、梅溪塘中保、佛南河上保、下保、大木店上保、下保などの五保には、紳士が一人も見當らない。但し、別表では佛南河上保の紳士數は四〇名となっており、餘りに多すぎるから、助修姓氏の編者が誤つて、中保、下保を書き落した可能性も考えられる。この佛南河上保を別にすれば、比較的紳士の居住者の多い保は、華岩寺上保、太蘇河下保、枚武岩下保、鄒家鋪上保、下保など、紳士が二〇名前後も居住する地域である。而もその過半數を占める者は、監生・生員、あるいは職員であることに注目したい。前述したように、職員も捐納によって獲得できる地位であつたから、捐納監生と共に、比較的富裕な紳士によって、この職階が購求されたものであらう。

商城縣紳士分布圖

保名の傍に記入した数字は紳士數、
○を付した数字は上層紳士、然らざ
るものは下層紳士(武生を含む)數。
上・下は上保・下保を指す



他方、袁武集上保、下保や、蘇仙河上保、下保、太蘇河上保、竹根河下保、上石橋保、陳家集保などの如く、四〇五名、乃至一〇二名の保も、かなり見られる。而もそれらの場合、生監層など下層紳士が大部分を占めている。

郷村に居住する上層紳士の例を見ると、州同の何元祥（二五）、布經の敖振邦、敖振甲（二六、二九）、州同の羅稠（三六）、同じく州同の姚鵬九（二九）、員外郎の張國鸞（三六）、知縣の張振翔（三五）、布經の張振需（三七）、同じく布經の趙振祖（四三）、州同の李蘭臺（四三）、布經の梅旭東（五〇）らである。ところが、縣志卷八、貢舉志、科目の條を見ると、進士の條は勿論、舉人の條にも彼らの姓名を見出すことはできない。この事實は、前にも推測したように、彼らは殆んど捐官であり、實官ではなかったのである。恐らく彼らは郷居の有力地主であり、その財力によってこれらの官職を入手したのである。それ故、彼らは郷居紳士であり、官職を獲得した後も、そのまま郷居生活を續けたものであろう。

文字どおり退任官であった程國仁（二）、楊嗣沅（六）、黃仁萬（三四）らは、いずれも城内に居住していた。これら少數の退任官は城居生活を續け、商城縣内において大きな發言力を保持したと考えられる。右に掲げた「商城縣紳士分布圖」を見れば、上層紳士は比較的縣城に接近して住んでいたと言えそうである。下層紳士は全縣に分布しており、廣く民衆の間にその影響力を行使したのであろう。

四

繰返し述べてきたように、商城縣の紳士の七〇%以上は生監層であり、彼らは城關よりも寧ろ郷村に多く居住していた。顧炎武は明末における生員の弊害を強調したが、一九世紀初頭になると、それは監生層の問題になったのである。生員よりも、捐納による監生の方が激増したから、その弊害は監生層の方より大きくなったのであろう。

同じ紳士層に屬すると言っても、上層紳士と生監層とは、かなり利害關係も異なっていた。⁽²⁸⁾上層紳士（いわゆる郷紳）は國家から多大の特權を賦與され、手厚く保障されていた。これに對して生監層は屢々國家權力にきびしく彈壓された。

この爲、生監層は自己の社會的・經濟的利權を擁護するために、法律を無視した行動をとることをも辭さなかった。封建中國の地方統治にあつて、最も重要な課題は徵稅と裁判であつた。生監層が徵稅や裁判に介入・干與して、自己の利益を得ようと企てたのも當然である。徵稅に關連して彼らが行なつた不法行爲は包攬であつた。勿論、上層紳士も包攬に干與しなかつたわけではないが、彼らの中で郷居する者は僅かであつたから、自ずから生監層が包攬行爲に積極的にかかわり、それによつて蓄財を謀ることになつた。

包攬と並んで、生監層の行なつた不法行爲には抗糧がある。彼らの抗糧運動は、主として浮收の苛酷な徵收、或いは包攬に對する嚴しい取締りへの不滿に端を發し、この抵抗運動が暴動に發展し、生監層＝郷居紳士と上層紳士＝郷紳との對立をも招いた。かかる場合、生監層は團結して統一行動をとつた。そうしなければ、彼らは有力郷紳や國家權力に對抗できなかつたからである。

生監層の裁判介入も早くから問題になつており、十七世紀中葉、早くも清朝は生員の官衙出入を制限し、官衙へ立入る者には、その姓名と用件を記入する「門簿」の作成を命じている。然し、彼らは郷村における指導的地位、民衆への影響力を利用して、巧みに裁判に介入し、不正利益の獲得を謀つた。⁽²⁹⁾それ故、彼らは「刁生劣監」と罵られたわけである。

彼らは郷村に居住していたが故に、屢々市集の牙行となつて利益獲得を企てることがあつた。紳士には牙行の如き商業活動を行うことが禁ぜられていたが、この魅力的な利權を彼らは決して放置しようとはしなかつた。郷村に居住している強味を發揮して市集を霸佔し、市集に集つて来る民衆から不當な收奪を行ない、私囊を肥やす場合が多かつた。⁽³⁰⁾

彼らは又、蓄財の爲には法で禁ぜられている賤業に従事することもあつた。例えば、娼家を經營したり、典當業を營んだり、家畜商や行商などに従事する者も出現した。生監層の數がふえればふえるほど、財産の無い者も出てくるから、彼らは禁令を無視してでも、賤業に従事するに至つた。商城縣の場合でも、三百數十名の生監層が、すべて安定した經濟基盤を持っていたとは考えられない。彼らが蓄財の方法を追求するには、縣城内に住むよりも、むしろ民衆と近接した郷

村に居住する方が有利であったからとも考えられる。彼らが敢えて城居生活を求めず、郷村に居住しつづけた理由は、この様な點にあったのではあるまいか。

おわりに

清代の紳士層の問題をとりあげたものの、單に十九世紀初頭の河南省商城縣の場合を考察したにすぎない。いわば限られた時代の限られた地域の紳士層を対象にしたもので、これを以て紳士層の存在構造として一般化することはできない。但し、從來の紳士研究が華中に偏していたのに對し、本稿が華北の一例を提示したことにはなるであらう。

本稿は、最初にも述べたように、筆者が地方志を繙讀していた際に、偶々眼にとまつた商城縣志の「助修姓氏」に興味を抱き、これを素材として紳士の存在形態の分析を試みた次第である。ただ、筆者の力量不足と準備不充分から、まことに不満足な考察に終つてしまった。現在、わが學界における紳士研究は、理論的な追求が先行して、具體的・實證的な研究はすこぶる乏しい。「郷紳」の定義一つをとつてみても、學界に共通の理解は成立していない。⁽³¹⁾ 本稿が、今後の實證的な紳士研究の契機ともなれば、幸いである。

註

- (1) わが國では一般に紳士全體が「郷紳」と呼稱されることが多いが、以下にも述べる如く、筆者は郷紳を七品以上の退任官、または進士及第者と考へるので、八品以下の退任官、舉人、貢生・生員・監生などをも含めて、紳士と呼ぶことにする。本稿では、郷紳を右の如く規定して用いることにする。

- (2) 清史稿卷一〇八、選舉志三には「郷試第一を解元と曰い、會試第一を會元と曰い、〔殿試〕二甲第一を傳臚と曰う。悉く明の

舊制に仍るなり」とある。程國仁は『明清進士題名碑錄索引』によれば、嘉慶己未科の第二甲首席であった。

- (3) 黃仁萬は、縣志卷八、貢舉志、科目、進士の條には、嘉慶己未科の合格者と記され、「辛酉殿試、翰林院編修」と割注されているが、『明清進士題名碑錄索引』には見當らない。

- (4) 東路とは東郷の意で、全縣が東西南北の四郷に區分されている。東郷は三里一二保、南郷は三里二〇保、西郷は四里一三

保、北郷は二里九保に分たれている。

- (5) 通常、縣衙門の胥吏の執務房は六房（吏戸禮兵刑工）と承撥科より成っていたが、此處では財政擔當の戸房の他に「倉房」が存在している。これは全國的に共通の制度であったか否かは不明である。

- (6) 黃澤萬については、縣志卷八、貢舉志、封贈の條に「増貢生、子思桂の候選知縣なるを以て、加級して奉直大夫に封ず」とあるので、「助修姓氏」にはない「増貢生」の三字を補足した。

- (7) 黃師萬については、縣志卷八、貢舉志、封贈の條に「庠生・宗祠を創り族姓を收む。伉爽義を好み、事に遇えば勇爲す。長子思漸を以て徵仕郎に封ぜられ、……次子思宸を以て奉直大夫に封ぜらる」とあるので、「庠生」の二字を補足した。

- (8) 張振升については、縣志卷八、貢舉志、封贈の條に「監生、姪國鸞の刑部山西司員外郎なるを以て、奉直大夫に誥封せらる」とあるので、「監生」の二字を補足した。

- (9) 関斗基著、山根・稻田譯「清代へ生監層」の性格」(上)（明代史研究四、一九七六）、二七頁参照。

- (10) 上層紳士の内容(こころ) 張仲禮 Chung-ji Chang: *The Chinese Gentry, Seattle, 1965, 267* 官僚・進士・舉人・貢生をこの範疇に入れている。而して下層紳士には例貢生・生員・監生を入れている。

- (11) これらを批判的に學說史として整理したものに、森正夫「いわゆるへ郷紳的土地所有」論をめぐって」（歴史評論三〇四、一九七五）、同「日本の明清時代史研究における郷紳論について」

て」（歴史評論三〇八、三二二、三二四、一九七五〜七六）、および吳金成「日本における明清時代紳士層研究について」（明代史研究七、一九七八）参照。

- (12) 楊嗣沅は「明清進士題名碑錄索引」によれば、嘉慶辛酉科の三甲四三席であるが、張振翔の名前は、同書には見當らない。

縣志卷八、貢舉志、進士の條にも見られない。

- (13) 縣志卷八、貢舉志、明經の條に、周曦について「作淵の子、附貢、光祿寺の額外典簿」と記されている。

- (14) 縣志卷八、貢舉志、明經の條には、羅摺について「慶貢、候選訓導」とあり、試用訓導とは述べられていない。

- (15) 吏目とは、吏員・貢生・監生などの中から採用される者で、從九品の下級官である。

- (16) 服部宇之吉『清國通考』第一篇（大安復印、一九六六）九五〜九六頁、参照。

- (17) 同書、九七頁、参照。

- (18) 恩貢生とは、服部『清國通考』第一篇（九七頁）によれば、「朝廷ニ慶事アル時（譬へば皇太后七旬ノ賀典ヲ行フ等）其年ノ歲貢生ヲ恩貢生トナシ、翌年ハ定規ニヨレバ歲貢生ヲ出サザル年ナルモ、仍ホ貢生ヲ出ス」と説明している。

- (19) 優貢生とは「原來廩膳生若シクハ增廣生タリシ者ニテ、試験優等ヲ以テ選拔セラレ、再ビ禮部ノ試ヲ經テ「國子」監ニ入ル者」（服部、前掲書、九八頁）を言うわけである。

- (20) 服部宇之吉、前掲書、一〇二〜一〇三頁。

- (21) 亨林文集卷二、牧野巽「顧炎武の生員論」（林友春編『近世中國教育史研究』國土社、一九五八、所收）参照。

(22) 服部宇之吉、前掲書、九二～九三頁。

(23) 嘉慶會典事例卷二九九、禮部、學校、河南學額の條。

(24) 光緒光州志卷一、學校志には「商城學、額設廩生二十名、增生二十名、額進文童十五名、武童十五名」とあるから、廩生・增生併せて一二名というのは少なすぎる。

(25) 生員、文生、庠生は、單なる呼稱の相異であつて、各保によつて記入の仕方が異なつたのではあるまいか。

(26) 嘉慶商城縣志卷一、地理志。

(27) 張振翔については、註(2)で指摘した如く『明清進士題名碑錄索引』に出てこないが、縣志卷八、貢舉志、仕籍の條には「湖南攸縣知事」と記されている。やはり、知縣經歷者であつたのであろう。

(28) 上層紳士と下層紳士の對立・矛盾が、明末に至つて表面化した點については、拙稿「明末農民反亂と紳士層の對應」(『中嶋敏先生古稀記念論集』下卷、汲古書院、一九八一、所收)で、多少論及した。

(29) 生監層の不法行爲については、関斗基著、山根・稻田譯、前掲論文(下)、(明代史研究五、一九七七)五一～五七頁、参照。

(30) 監生層による定期市の霸佔については、拙稿「明清時代華北市集の牙行」(『星博士退官記念中國史論集』星先生退官記念事業會、一九七八)参照。

(31) 最近、和田正廣「明末清初の鄉紳用語に關する一考察」(九州大學東洋史論集九、一九八二)が發表され、鄉紳という語の示す内容を検討しているが、充分に説得的ではない。なお、和田が鄉紳の「鄉」をわざわざ地方行政區畫の鄉と關連させて考へようとしているのは、不必要な操作と思われる。鄉には本來「故郷」の意味があり、鄉宦・鄉紳とは故郷に引退した官僚を指したものと考えられる。吳金成著、山根・稻田譯「明代紳士層の形成過程」(明代史研究八、一九八〇、未完)で論證される如く、明末に至つて生監層が一つの階層として固定化されたとすれば、彼らと上層紳士＝鄉紳との間には一線が劃されたわけであり、兩者を區別して考へる必要が出てくる。

class who had been emancipated from slavery by the edict promulgated in 577 by the Emperor Wu 武帝 of the Zhou 周 dynasty. Therefore, in North China there were many feudal dependents called *tongli*, *puli* or *buqu* even after 485, and we find again the numerous *ke* in the historical texts of the Sui period. But it is necessary to keep in mind that the bonds between the landlords and their dependents were not always clearly specified in the legislation of the Six Dynasties and that this was a characteristic of Chinese feudalism.

The second part of the author's text will be translated and published in the Tôhōgaku 東方學, No. 63.

THE COMPOSITION OF THE GENTRY CLASS IN SHANGCHENG 商城 COUNTY, HENAN 河南

YAMANE Yukio

I tried in this article to analyse the structure of the gentry class in Shangcheng 商城 County at the beginning of the 19th century, by employing the namelist of contributors to the publication of the *Shangcheng xian zhi* 商城縣志, published in the Jiaqing 嘉慶 period. From this list I extracted a number of 536 persons who might be considered as the gentry, and investigated the social ranking they belonged to. I found that only 19 persons ever held an official position of rank 7 and higher, or had been successful in the *jinshi* 進士 examinations; it was clear that the greater part were *jiansheng* 監生 ('national university students') or *shengyuan* 生員 ('students').

Lately Japanese scholars doing research on the gentry usually use the expression *kyōshin/xiangshen* 鄉紳, but I suppose that those called *xiangshen* at the end of the Ming 明 were retired officials of rank 7 or higher, or retired *jinshi* ('doctors'). More than 70% of the gentry class in Shangcheng County were of the student class, and they exercised great influence in the contemporary rural society, and brought about all kinds of harm to the people. I think that in the gentry studies a distinction should be made between the *xiangshen*=higher gentry class and the lower gentry class, consisting mainly of students.